

たった一人の感染者が出ただけで

医療法人社団慈恵会 新須磨病院 理事長・院長 澤田勝寛

2020年2月、乗客に新型コロナウイルス感染症が発生したダイヤモンド・プリンセス号が横浜港に停泊し、その対応に批判が集中していた時は傍観者であった。その後、済生会有田病院（和歌山県）や相模原中央病院（神奈川県）での感染報道を見るにつけ、明日はわが身とは思いつつも、まだ楽観視していた。

当院は3月初めにコロナ対策チームを立ち上げ、週2回の会議を開き、対策マニュアルの見直し、感染防御資材の整備、発生した時の対応を決め、Xデイに備えていた。ただ、感染者が出た病院へのマスコミの遠慮のない報道を見るにつけ、何としても神戸で一番目の感染者が出た病院だけは避けたいと願っていた。

ところが、願いむなしく、神戸市で最初の感染者が出た病院になってしまった。

感染者は当院整形外科医師。確証はないが、院外で既感染者を診察したことによる感染の可能性が高いと思っている。記者会見でそのことを触れるつもりで行政と打ち合わせをして準備をしていたが、何らかの理由で記者会見はなくなった。その結果、当院だけが「ぼつつ」と浮いたように名前が公表され、まるで「さらし者」のような扱いを受けることになった。

25年前の阪神淡路大震災という大きな危機を乗り越えたという自負はあったものの、このたびのコロナ禍は地震とは全く別物であり、その対応に本当に苦労した。前もって想定していたことをはるかに越える問題が起こり、現実にならないと分からないことが数多くあることを改めて実感した。

感染発生時の状況

当該医師に症状が出たのが3月28日で、

直ちに自宅待機とした。3月31日夜にPCR陽性が判明し、4月1日に指定医療機関に入院した。

4月1日朝7時に感染対策チームを招集、対応を協議した。当日朝から新規患者はお断りして予約患者のみ診察をすること、午後からは閉院することを掲示し、職員が来院患者に説明した。

午後、保健所から3人の担当官が来院した。調査を受け、今後について打ち合わせを行った。まず、患者・職員の濃厚接触者の洗い出しを行った。その結果、職員の濃厚接触者は自宅で、患者の濃厚接触者は入院のまま、2週間の健康観察をすることとなった（結果的には健康観察期間が過ぎても二次感染者は出なかった）。

感染医師の勤務時間が短く、濃厚接触者が少なかったことと、動線が特定できたことにより、保健所は感染拡大の可能性は低いと判断した。そして、保健所の指示に従っ

て、翌4月2日から病院の診療業務を再開した。

ただ、予定していた記者会見は行われず、当院の名前だけが公表された結果、当日夕方より問い合わせが殺到し、その対応に追われることになった。

患者対応

感染者が出た病院ということで、予約取り消しが相次いだ。電話回線がずっと塞がってしまい、電話がつかないとの苦情も多数寄せられた。外来師長を中心に、医事課職員や夜間担当職員が手分けして電話対応をした。

電話では、執拗に医師名の開示を求められたり、自分が感染したら病院が責任を持つのかといった非難や脅しのような内容もあった。

電話口では、「保健所の指示に従って、翌日から通常診療を行っている」ことを淡々と伝えるようにした。数日間は夜10時ごろまでずっとその対応に追われた。電話がつかないため、メールでの問い合わせも多数寄せられた。

風評被害(集まる地震、離れるコロナ)

噂には聞いていたが、これほど風評被害やバッシングがあるとは思わなかった。阪神淡路大震災と比較して「集まる地震、離れるコロナ」と自嘲気味につぶやいていた。

地震では、地域みんなが被害者となる。家を失い、家族を亡くし、途方に暮れた被災者が集まり抱き合い無事に涙して、肩を寄せ合い復興を目指して支え合った。

コロナ感染は全く異なる。感染が分かった途端に、誰もが離れていく。仕方がないこととはいえ、あまりにも極端で冷淡。職員や職員の家族にも風評被害が及んだ。当院はコロナウイルスの被害者であるが、世間はそうは思わない。

新須磨病院に勤務しているだけで、子どもの保育を断られたり、ママ友が離れたり、子ども同士が一緒に遊べなくなったりした。当院職員というだけで、診療拒否をするクリニックもあった。金融関係では、来院するのが怖くて2週間先延ばしを依頼してきたようなところもあった。

励ましと真の友

そんな中、「頑張ってくださいね」と真心のこもった励ましのお言葉をたくさんいただいた。私の診ている患者さんは、こんな時こそと、家族で受診してくれた。ご利用くださいと「手作りのマスク」を届けてくださったご近所の方もいた。入院患者さんから、主治医を通じてお見舞いが届けられた。

ある金融機関の理事長からは、翌日に電話がありお見舞いが届いた。知己からは、寄せ書きとマスク2,000枚が送られてきた。不安の中、受診される患者さんから「大変やね。応援しているから頑張ってね」と優しい言葉をかけられたと涙ぐむ職員もいた。

「まさかの友が真の友」、「本当の友情とは闇夜で輝く蛍光のようなものである」という言葉どおり、真の友を知ることができた。

水際作戦

4月1日のコロナショックがやや落ちついてから、水際作戦の強化を図った。職員には毎朝の検温とその報告、体調不良時は遠慮なく休むことなどを繰り返し伝えた。

発熱者を診察するための発熱外来を救急外来で代用することにした。通院患者は玄関で熱を測定し、熱があれば外を通して発熱外来に誘導し、診療科をまたいで決めた担当医が発熱者の診察をすることにした。

職員を守る

当院は指定医療機関ではないので、コロナ患者を直接受け入れることはない。コロナ患者を受け入れている病院の医療従事者へのバッシングは聞くに耐えないものがある。当院のように医師ひとりの感染が分かっただけで、前述のような数々の風評被害があった。

コロナという見えない敵にいつ襲われるかもしれないという不安を持ちながら、日々の医療に携わっているなかでの今回のコロナショックは、職員の心に大きな影響を及ぼした。神経症になり眠れなくなった職員がいる。夫と不仲になった看護師もいる。子どもがかわいそうだと泣く職員もいる。

私は毎週月曜日、院長のひとり新聞と称して院内報「年輪」をかれこれ15年間発行しており、その紙面を通じて職員を勇気づけ語り掛けるようにしていた。それでも、今回のコロナショックで傷ついた職員に対して、何かをせずにはいられない気持ちとなり「美味しい肉でも食べてくだ

私は毎週月曜日、院長のひとり新聞と称して院内報「年輪」をかれこれ15年間発行しており、その紙面を通じて職員を勇気づけ語り掛けるようにしていた。それでも、今回のコロナショックで傷ついた職員に対して、何かをせずにはいられない気持ちとなり「美味しい肉でも食べてください」というメッセージを添えて、金一封を渡した。今回の踏ん張りは、病院職員だけではなく、院内清掃や警備、売店の職員の協力、他院であったような乗車拒否もせず、快く当院の患者や職員を乗せてくれたタクシートの運転手さんのおかげでもある。そこで、彼らにも職員と同様のメッセージを添えて金一封をお配りした。

病院名の公表の意味は

病院も診療所もひとつの事業体であり、医療従事者は社員である。会社の社員に感染者が出たときも、その会社名がすべて公表されているのであろうか。

指定医療機関でなくても、有熱者は搬送される。その中には新型コロナウイルス感染者も紛れ込む。そして、医療従事者も感染する可能性がある。その場合も、現状では院内感染となり行政は記者発表をする。そして翌日からは当院と同じような状況に追い込まれる。公立病院や公的病院なら経営破綻はないが、民間の医療機関にとっては死活問題である。熱のある救急患者を「たらい回し」という報道を目にするが、各病院の置かれた立場を考えれば、さもありなんと思ってしまう。